

## 学位請求論文審査報告要旨

2012年10月10日

申請者 河野真太郎

論文題目 田舎者の英文学——二十世紀イギリスの「文化」とその地政学

論文審査委員 三浦 玲一  
中井 亜佐子  
川端 康雄

### 1 本論文の内容と構成

本論文は、三部構成である。論文全体の方法論とその意味が、作品分析の例示を通して具体的に説明される第一部、二〇世紀初頭のいわゆるイギリス・モダニズム文学が分析される第二部、第二部を補完するかたちで、文化史、批評史、思想史をたどりながら、現在の視点からイギリス・モダニズム文学を研究することの意味が論じられる第三部から成り立っている。全体の枠組みは、まず序章で提示され、終章では、そこまでの議論をまとめながら、現在における批評の意味と理念が説明される。

イギリス文学研究を基本的な枠組みとしながら、「批評すること」の可能性を論じた、狭い意味での「文学研究」の枠を押し広げる、野心的な試みとなっている。

目次は以下のとおりである。

#### 序章

#### 第一部 二十世紀の経験

第一章 田舎者の英文学——レイモンド・ウィリアムズと文化の地図

第二章 『闇の奥』から『クラッシュ』へ——二十世紀における認識地図の変容

#### 第二部 モダン、モダニズム、世界

第三章 都市の農夫——ホープ・マーリーズと遊歩者のユートピア

第四章 都市と田園のテクノロジー——歩く『ダロウェイ夫人』

第五章 『ハワーズ・エンド』とグローバル・イングランド文化の出現

第六章 未来派から遠く離れて——ウルフ・未来派航空劇・マニフェスト芸術

#### 第三部 文化と自由の系譜学

第七章 メタ・メタカルチャーとモダニズムの緩慢な死

第八章 二つの文化と反革命

第九章 メリトクラシー、デモクラシー、女性の暮らし

終章 ユートピア的テキストとしての批評

参考文献一覧

## 2 本論文の概要

『田舎者の英文学——二十世紀イギリスの「文化」とその地政学』は、二〇世紀初頭、いわゆるモダニズム期のイギリス小説研究を一つの中心としながら、現代の日本において、イギリスのモダニズム小説研究を真摯に行おうとするとき必然的にはらまざるをえないいくつかの問題について、系統的な研究を行った優れた業績である。

そのような問題のひとつは、日本とイギリスの関係になる。本論文は、凡庸な日本とイギリスの対照論や比較文化論、あるいは、日本がイギリスから近代化を学んだというような発展論に陥ることはない。タイトル「田舎者の英文学」とは、第一章で論じられるように、筆者河野氏自身のことであると同時に、夏目漱石のことでもある。また、それは、ウェールズ出身のレイモンド・ウィリアムズのことでもある。レイモンド・ウィリアムズの『都会と田舎』を導きの糸としながら、漱石の『三四郎』とウィリアムズ自身の小説『ボーダー・カントリー』を比較し、二〇世紀前半におけるメタナラティブであった近代化、発展、そして、都会と田舎の分離が、漱石とウィリアムズの双方に共有された物語であったことを確認しつつ、自身もこの物語を生き、この物語の結果として英文学研究に従事しているのだと河野氏は結論づける。

二〇世紀前半のトランスナショナルな「大きな物語」としての近代化を議論枠とすることは、本論全体の構成において、二つの課題を要請することになる。一つ目の問いは、トランスナショナルな「大きな物語」を指定することがともなう当然の帰結、つまり、イギリスの問題をわれわれの問題として理解し解釈しようとするとき、イギリスとわれわれのあいだの差異はどのように扱われるのか、扱われうるのかという問いとなる。二つ目の問いは、二〇世紀前半を出発点とするとき、それをわれわれの現在とどのように関係づけるか、言い換えれば、現代のわれわれにとって二〇世紀初頭の文化を研究することにどのような意味があるのかということである。その答えは、副題『二十世紀イギリスの「文化」とその地政学』にあるように、二〇世紀全体を一つのパースペクティブのもとに理解しようとしながら、二〇世紀におけるイギリス文化を、インターナショナルもしくはグローバルな地政学のもとに分析することから提示される。

第二章ではこの議論が行われている。具体的には、帝国主義もしくはその一つの変奏としてのポストモダニズム、言い換えると、大英帝国を中心とした一九世紀型の帝国主義と、現在では主にグローバリズムと呼ばれる二〇世紀のアメリカ合衆国中心の帝国主義の「文化」としてのポストモダニズムを参照点としながら、この二つの枠組みが重な

り合いながら前者から後者に移行する結節点として、モダニズムを位置づけようという試みである。一九〇二年のジョーゼフ・コンラッドの『闇の奥』とJ・G・バラード一九六六年の『結晶世界』におけるアフリカ表象を比較しながら、バラード一九七三年の『クラッシュ』のポストモダニズムを分析するのが、第二章の議論である。

このような枠組みから出発する河野氏の研究の特徴は、イギリス小説の分析に軸足を置きながら、1) レイモンド・ウィリアムズやフレドリック・ジェイムソンを参照しつつ、国際的な地政学もしくは帝国主義の問題を最大の問題枠として繰り返し検討すること、2) 対象となる作品が、どのような文化と社会の枠組みなかで生産されたか、また、どのような文化と社会の枠組みなかで受容されたかを重視すること、ついで、3) たとえば「英文学研究」というような制度がどのような知の枠組みのなかで成立し、機能しているのか（あるいは機能していないのか）をも分析対象とすること、4) 最終的には、とりわけウィリアムズに寄り添いながら、以上の考察を踏まえて、文化を一つの全体として把握するための全体性の獲得を目標とし、どのような全体性のなかで批評は産み出されるべきかの把握を最終的な目標とすることの四点と整理されるだろう。

第四点については、河野氏自身のマニフェストとも読むことのできる、終章「ユートピア的テキストとしての批評」で確認される。氏のウィリアムズ理解の特色は、近年のウィリアムズ研究の一つの流れである彼のアイデンティティ、つまりウェールズ出身であるという彼の出自の確認を踏まえながら、それを、近代イギリスと田舎・辺境ウェールズの対立といった「文明の衝突」の問題や、あるいは、故郷喪失者としてのウィリアムズのイギリスの都会における個人主義的な抵抗といった疎外論的な枠組みに還元することなく、むしろ、互いに重なり合い、時代とともに変容する、複数の文化・社会のなかを移動しながら、それらを多層的に見つつもその各々にコミットした知識人として見る点にある。このようなウィリアムズ理解が、批評とはどのようなものであり、どうあるべきかという氏の議論の根底を定めている。

第一部に収められた第一章、第二章は、すでに述べたように、この論文全体の議論枠を提出する序章として定義されている。

第二部は、英文学研究においてはモダニズムと定義される二〇世紀初頭の時期に発表された小説と詩を分析するものである。現在では忘れられた作家であるホープ・マーリーズを発掘した第三章は、彼女のアヴァンギャルド詩『パリ』を分析しながら、この時期の文芸におけるモダニズムの意味を定義しようとする。近代化する都市の表象を、内容ばかりでなく形式レベルでも反映することで必然的にモダニズム詩となったマーリーズの作品を分析することは、前衛・アヴァンギャルドとして始まったモダニズムが、

比較的短期間において、T・S・エリオットに代表されるような、反近代化のメンタリティの表出としての文化的な保守へと変容していったことの転換点を位置づけるための方法となっている。それは、マーリーズンの詩のなかに、有機体論的な田園の理想化に還元されない都市の表象を見ることであり、その都市表象のなかに、労働者の表象の痕跡を見いだすことである。

これを受けて、第四章は、河野氏のそもそもの専門であるヴァージニア・ウルフの代表作とも言える『ダロウェイ夫人』を、前章で提示された田舎と都会の軸から分析する。その分析は、一方では、この作品が、当時流行の「田園都市」の言説に寄り添いながら、田舎と都会の融和もしくは合一を目指していると結論づけることになるが、他方また、田舎と都会の合一から理想的な共同体の姿を想像しようとする主題が破綻する部分こそが、最も重要であると指摘することにもなる。その破綻は、一九世紀的な大英帝国の枠組みが崩れて、むしろナショナリストなイギリスのアイデンティティが求められたことを、より正確には、そのようなナショナル・アイデンティティの探求が、ウルフと彼女のリベラリズムにおいては、その後の福祉国家的な枠組みへと向かっていることを示すと、河野氏は結論づける。

第五章で扱う、E・M・フォスターの『ハワーズ・エンド』は、フレドリック・ジェイムソンが、モダニズム文学と帝国主義の関係を定義する際に言及した作品としてよく知られたものである。ジェイムソンの論文においても重視された、この作品における鉄道と自動車の表象の关系到留意しながら、河野氏は、この小説において提示される風景が、「産業化されたイギリスの風景」と一般的に理解されていることに対し、それはそうであるばかりでなく、グローバルな布置における「産業化されたイギリスの風景」であることを具体的に例証する。それはつまり、ジェイムソンの言うように、この作品が帝国主義の表象不可能性との関係においてモダニズム文学として成立しているならば、そこで失われた参照点となっている帝国主義とは、衰退しつつあった一九世紀型の大英帝国であるばかりでなく、勃興しつつあった二〇世紀型のグローバルな帝国主義とそれとの混合物であったことを意味している。テキストの詳細の分析を通じて、ジェイムソンの議論に重要な注釈を与えつつ、この章は終わる。

イギリスのモダニズム文学の研究は、Jed Esty の *A Shrinking Island* (2003) の発表以来、帝国の文学としての一九二〇年代モダニズムと、帝国の衰退期におけるナショナリストの文学としての三〇年代モダニズムの分別が重要な論点となってきた。四章、五章において河野氏が提示したことは、この枠組みを基本的に引き受けつつ、福祉国家萌芽期のリベラリズムに寄り添う三〇年代モダニズムを、同時に、二〇世紀のグローバリズム的な帝国主義と親和的な関係にあるものとして提示することである。Esty がそこでとりあ

げて以来大きな注目をあびているウルフの『三ギニー』と『幕間』を題材とながら、第六章で河野氏は、ウルフの「群衆」表象の系譜をたどり、リベラリズムの作家としてキャンノン化されたウルフにとって前衛はなにを意味し、なにを意味しえたはずなのかを問う。それは三章でマーリーズにおいて整理された問いを、もう一度ウルフについて問い直すことであり、二〇世紀のイギリス文化と地政学のなかに、可能性としてのウルフをもう一度位置づけ直そうという試みである。

第二部における河野氏の各作品論の特徴は、各作品を各々の歴史的な脈に位置づけ直し、各作品の政治性を適切に取り出そうという枠組みでそれが行われている一方で、それらが同時に、各作品を独立した一個の作品として扱い、各々の全体性を重視することで、作品を歴史のなかに還元してしまうことなく、むしろ各作品に見られる作者の取り組みから、現実とはまた別にありえた歴史の可能性、ユートピア的な可能性を見いだそうとする点にある。言うまでもなく、この特徴は、河野氏の作品論における最大の美点の一つであるが、しかし、このことは同時に、作品論は作品論の地平から逸脱することなく、作品のその内部と外部の関係についての問いが、各作品において具体的には検討されても、より広いかたちで定式化されることはないという事情を意味している。この構造を補完する機能を追うのが、文化史、批評史、政治史の体裁をとる第三部である。第三部は、政治的な批評を作品に対して誠実に行うという難題が解決されたあとに残るものを拾い上げながら、第二部において実践された批評をもう一度歴史的な脈のなかに差し戻しつつ、批評することの理念を問う結論へと向かっていく。

第二部において主要な時代区分であった一九三〇年代は、実のところ、文化論かまびすしい時代であったことを確認しながら、そこにおいて「文化」の定義がどのように変容していたのかを問うのが第七章である。一九世紀におけるマシュー・アーノルドの『教養と無秩序』から二〇世紀中葉以降の（レイモンド・ウィリアムズ自身も関与した）カルチュラル・スタディーズにいたるまでの文化の定義の変遷を辿りながら、これらの議論は、英文学という制度における価値観を深く規定したのと同時に、共同体論・統治論としてつねにある種の政治性を負ったことを確認したのち、この章は、ヴァージニア・ウルフと論争をおこしたQ・D・リーヴィスの文化論に焦点をあてる。文化論の変遷をたどることの意味は、文化とはなにか、それはどのように定義されるべきかという繰り返された論争において、そこで共通して問うことができなくなった問いとはなにかを探ることであり、その問いをQ・D・リーヴィスに当てはめるとき、ここでもまた、リーヴィスとウルフにおける「文化」の想像力は、一九世紀から二〇世紀への、大英帝国からグローバリズムへという帝国主義の変容を、いわば不可視の前提として共有していた

ことが論証される。

第七章における「文化論」論争の変奏が、八章の対象となる「二つの文化」論争である。C・P・スノウとF・R・リーヴィス（Q・D・リーヴィスの夫）の著名な「二つの文化」論争を軸としながら、ここでもまた河野氏は、一八八〇年代のT・H・ハクスレーとマシュー・アーノルドのあいだの同工の論争から、一九九〇年代のいわゆるソーカル事件にいたる系譜を提出する。そこから導かれる洞察は、人文学と科学の解離という論争がその二項対立によって不可視化する真の主題とは、メリトクラシーと教養による階級上昇の是非であったという指摘となる。この指摘は、スノウの「二つの文化」論争における福祉国家的なメリトクラシーの重要性を指摘すると同時に、ソーカル事件における「二つの文化」が、新自由主義的なわれわれの現在において、メリトクラシーという概念がどのように変容もしくは反転してしまったのかを映し出すことになる。それは、旧来の階級社会を破壊し実力主義を導入した、福祉国家におけるメリトクラシーが解放的な側面を確かに持っていたのに対して、実績主義、業績主義へと変容していった新自由主義期におけるメリトクラシーは、福祉国家の「理想」を拡張しつつも、新たな搾取の制度のイデオロギーとなってしまったということだ。

さらに河野氏は、ウィリアムズ自身が関与した成人教育が、福祉国家から新自由主義へと反転したメリトクラシーの外部を想像するための契機になると指摘するが、この視点が、第八章において、『私自身の部屋』で展開されたウルフのあまりにも有名なフェミニズム論の批判的再読の契機となる。ウルフのフェミニズムは、第六章においてすでに指摘したQ・D・リーヴィスによって批判されているが、その批判は、メリトクラシーによって階級上昇を果たし「働く女性」となったリーヴィスにとって、「自己実現のための場が用意されれば良い」と説くウルフのフェミニズムは、ブルジョア・フェミニズムであり、有閑階級のユートピアであるに過ぎないものとして現れるという点にある。リーヴィスによる批判を参照するとき、『私自身の部屋』が論じるユートピアは、現在にわれわれにとっては、確かに新自由主義的なそれに囚らずも近似していることを確認しつつ、河野氏は、フェミニズムと労働の問題が交差する地点が、つねに自己実現のための労働の承認という新自由主義的な限界の外に出られないことを系譜的に確認していく。ただし、この確認は、ウルフのフェミニズムの限界を指摘するだけのものではない。その限界を越えるためのオルタナティヴを、河野氏は現時点では提出できないとするが、しかし同時に、この確認を通じて、ウルフの遺産はわれわれの現在を批評的に確認するための洞察として、確実に受け継がれていると宣言する。

### 3 本論文の成果と問題点

本論文の成果は、1) とりわけヴァージニア・ウルフを中心に、本論文が扱った当該作品について、英米の最新の批評を参照しつつ、それらを踏まえながら乗り越えた、新しい読解の可能性を提示したこと、2) とりわけ、レイモンド・ウィリアムズとフレドリック・ジェイムソンのマルクス主義批評をこれまで行われてこなかったかたちで接合、また、種々の批評の方法論を踏まえながら活用して、新たな観点と豊富な調査をもとに、英文学研究の斬新な方法論を提示したこと、3) 作品読解とそれをとりまく文化・社会の理解を平行させながら、批評としての文学研究のあり方の理念的なモデルを提示しようと試みたことの三点にある。

言い換えると、このような重要な試みは、1) 本論文において完成されたとは言えず、2) 試みとして実践されてはいるが、明確な方法論として定義されてもおらず、3) 既存の理論との擦り合わせにおいても、たとえば各用語の意味の定義といった点において、曖昧さが残るという限界を持つが、「終章」でも述べられるように、現代を生きることと批評との関係を断絶せずに、われわれの現実の生活と批評行為を連続させようという目標をもつ氏の試みにおいて、これら限界は、むしろ確信犯的に、あえてそのように提出されている。論文の完成（度）というものをどのようにとらえるべきかにも関わるこの問題については、今後の氏の業績を見ていくほかないだろう。

#### 4 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、河野真太郎氏に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考えます。

## 最終審査結果の要旨

論文審査委員 三浦 玲一  
中井 亜佐子  
川端 康雄

2012年7月27日、学位請求論文提出者、河野真太郎氏の論文『田舎者の英文学——二十世紀イギリスの「文化」とその地政学』にかんする疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、河野氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、河野氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。